

ヒロシマと建築家

＜東日本大震災復興応援メッセージ＞

日時 2013年11月23日～2013年12月3日
10:00～17:00

会場 旧日本銀行広島支店
広島市中区袋町5-21

入場
無料

白井 晟一 1955年「原爆堂計画図」
磯崎 新 1968年「ふたたび廃墟になったヒロシマ」

特別
展示

企画
展示

「ひろしましみんひろば」
を考える
旧市民球場跡地周辺のあり方を考えます。



会員
展示

日本建築家協会中国支部
会員作品展
JIA会員の建築作品や活動内容をご覧ください。

＜主催＞ 公益社団法人 日本建築家協会中国支部
広島地域会 広島イベント実行委員会

〒730-0013 広島市中区八丁堀5-23 オガワビル TEL082-222-8810

＜後援＞ 広島県、広島市

＜協賛＞ (公社)広島県建築士会、(一社)広島県建築士事務所協会、(一社)日本建築学会中国支部、(一社)日本建築協会中国支部

ごあいさつ

JIA・日本建築家協会中国支部広島地域会は「ヒロシマと建築家」<東日本大震災の復興応援メッセージ>と題し、被爆建物である旧日本銀行広島支店において開催する本展覧会は、JIA・日本建築家協会が公益法人として出発するにあたり、建築家の活動の広さと深さを多くの広島市民および広島を訪れる人々に知っていただくとともに、東日本大震災の被災地へ向けて、被爆68年の平和都市広島から復興への応援メッセージを送りとどけようとするものです。

この展覧会をより多くの方にご覧いただき、建築家の活動を身近なものとして知っていただくことを心より希望いたします。

日本建築家協会中国支部広島地域会
会長 垂井 俊郎

本展覧会は2つの構成から成り立ちます。一つは建築家の原爆と平和への表現として、世界的建築家であり、広島平和公園の設計者である丹下健三の薫陶を受けた磯崎新が若き日にミラノ・トリエンナーレに出品した「ふたたび廃墟になったヒロシマ」の写真パネルです。この作品には人類は二度とふたたび都市をヒロシマのような廃墟にしてはならないというメッセージが込められています。もう一つは哲学的建築家として知られている白井晟一の「原爆堂計画」です。この作品は1953年のビキニ環礁における水爆実験の直後、核兵器の存在の問題が建築の造形として問われることによって、深い哲学的思考を建築として提示しています。

これら20世紀の日本を代表する平和への建築表現とともに、広島地域会による旧広島球場跡地における「ひろしましゅんひろば」の計画、さらに中国支部で活動する会員による作品パネルを展示します。これらは現在の建築家の活動も原爆からの復興の延長線上にある、広島における人類の理想の住まいと街づくりへ向けた復興の実現であると位置づけ、建築家の使命を共有することで、東日本大震災被災地へ復興応援メッセージを送るものです。

日本建築家協会中国支部広島地域会
広島イベント実行委員長 岡河 貢

「原爆堂について」

白井 晟一

TEMPLE ATOMIC CATASTROPHS は1954年からの計画である。私ははじめ不毛の曠野にたつ愴然たる堂のイメージを逐っていた。残虐の記憶、荒蕪な廃墟の聯想からであろう、だが構想を重ねてゆくうちに畢竟は説話的なこのような考え方をでて自分に与えられた構想力の、アプリアリな可能性だけをおいつめてゆくよりないと思うようになった。概念や典型の偏執から自由になることはそのころの自分にとって難しい、大きい作業であったが、悲劇のメモリーを定着する譬喩としてではなく、永続的な共存期待の象徴をのぞむには、貧しくともまず、かつて人々の眼前に表れたことのない造形のピュリティがなにより大切だと考えたからにちがいない。堂は直径九米程の円筒が、目にみえぬほど静かに流れる澄明な水の中から、一辺二十三米の方錐を貫通するという形をとった。そして軸のシリンダアと梁と壁をいくつかのキャストに分け、これを求心的に風呂桶の箍でひきしめてゆくといった工法を、力学の最も原理的で素樸な方程式で追求してゆくことであった。

「ふたたび廃墟になったヒロシマ」

磯崎 新

1968年5月、文化革命でパリが市街戦模様になった頃、三年に一度開かれるデザイン展「ミラノ・トリエンナーレ」に私は招かれた。はじめてやる海外での仕事だった。建築家のジャンカルロ・デ・カルロが打ち出したテーマは「グレーター・ナンバー（大量の数）」。原爆が落とされた長崎、広島を私は思い浮かべた。

高度経済成長期の日本では、バラ色の未来図が流布していた。私は破壊（死）と再生（生）を繰り返す都市の姿を具体的にそしていくらかの悪意をもって提示しようと企てる。

写真家の東松照明に頼んで原爆で灰となった遺体の写真をさがした。人間の死体が腐乱して白骨化するまでを微細に描く「九相図」と呼ばれる絵も集めた。グラフィックデザイナーの杉浦康平がこれをクローズアップし、切り刻んで、二十八枚のアルミパネルにプリントする。

赤外線センサーによって人が通るとパネルが回転するように仕掛ける。暗闇でサイケデリックな色の画像が明滅し、一柳慧が作った不穏な音響が降ってくる。さらに、『ふたたび廃墟になったヒロシマ』という未来の廃墟のモンタージュを大壁面にした。

